

おわりに

アメリカの軍人ハリー・G・サマーズの著作『アメリカの戦争の仕方』（杉之尾宜生、久保博司共訳、講談社、2002年）が突き付けた問いを改めて思い起こせば、何がヴェトナム戦争（さらにさかのぼれば朝鮮戦争）でアメリカを失敗させ、何が湾岸戦争を成功させたのかとの疑問が出てくるのは当然であろう¹³⁹¹。この問いに対してサマーズは、政治家が軍事の領域にどこまで介入するかが一つの分かれ目であると指摘した。すなわち、ヴェトナム戦争では政治家が軍事に対して過度に介入したために失敗し、逆に湾岸戦争では、政治家が戦争での大きな方向性を示すに留め、軍人に広範な自由裁量を与えたために成功したのと議論である。

しかし、実はこの議論は実証性に乏しく、逆に、新たなる「七首伝説」を生んだだけに過ぎないように思われる。第一次世界大戦後、ドイツが戦争に敗れたのは軍人の責任ではなく、国内の一部の勢力——例えば政治家、社会主義者、ユダヤ人——の発言や行動の結果である、と唱えたドイツ軍人エーリヒ・ルーデンドルフの議論のいわば焼き直しである¹³⁹²。

だが、フォークランド戦争が明確に示した事実は、戦争での勝利と敗北を分ける一つの重要な要素が政治家の資質——強いリーダーシップ——であるという点である。たとえ他にいかなる好条件が整っていたにせよ、サッチャーの戦争指導、すなわち強力なリーダーシップがなければ、イギリスがフォークランド戦争に勝利することなど決してなかったであろう。

戦争における強力なリーダーシップの必要性は、アメリカの国際政治学者エリオット・コーエンの著作『戦争と政治とリーダーシップ』（中谷和男訳、アスペクト、2003年）で明確に示されている¹³⁹³。そこでは、リンカーンやクレマンソーに代表される政治指導者を取り上げられ、彼らの強力なリーダーシップ及び戦争指導が、どのように戦争での勝利へとつながったかが明らかにされている。

そこで以下では、リーダーシップ（あるいは個人の資質）という要因を取り上げ、戦争での勝利と敗北について改めて考えてみたい。もちろん、戦争に勝利するためには、あるいは敗北を避けるためには、リーダーシップという要因はもとより、「技術」や「広義の意味での社会」に代表される数多くの要因の相乗効果が重要であることは言うまでもない¹³⁹⁴。

戦争におけるリーダーシップ、とりわけ政治指導者や軍事指導者の資質に注目する視点から歴史を振り返れば、指導者の判断力や決断力が決定的であった事例として、アレキサンドロス大王、ユリウス・カエサル、ナポレオン・ボナパルト、さらにアジアに目を転じればチンギス・ハーンや日本の織田信長など、直ちに多くの人物の名前が浮かんでくる。確かに、こうした人物はいずれも戦争で強力なリーダーシップを発揮し勝利に導いたとされる。

¹³⁹¹ ハリー・G・サマーズ著、杉之尾宜生、久保博司共訳『アメリカの戦争の仕方』講談社、2002年。

¹³⁹² ルーデンドルフについて詳しくは、三宅正樹、石津朋之、新谷卓、中島浩貴共編著『ドイツ史と戦争——「軍事史」と「戦争史」』彩流社、2011年、第6章を参照。

¹³⁹³ エリオット・コーエン著、中谷和男訳『戦争と政治とリーダーシップ』アスペクト、2003年。

¹³⁹⁴ この点については、石津朋之著『戦争学原論』筑摩書房、2013年、第4章を参照。

実際、個人の資質は戦争において極めて重要な役割を演じてきた。だからこそ、かつてプロイセン・ドイツの戦略思想家カール・フォン・クラウゼヴィッツは、「軍事的天才」といった概念を用いて軍人に高い能力を求めたのであり、不可測な要素が多くを占める戦争という事象の中で、軍人の精神的要素の重要性を強調したのである¹³⁹⁵。そしてこの事実は、政治家においても同様である。

実際、第二次世界大戦でのウィンストン・チャーチルや本論で考察したフォークランド戦争でのサッチャーの戦争指導が示唆するところは、危機という状況下では政治指導者個人の性格や決意が大きくものを言うとの単純な事実である。フォークランド戦争での断固とした戦争指導によってサッチャーは、アルゼンチンの侵攻を押し返したのみならず、国内でのイデオロギー上の改革の道すら切り開くことになったのである。

1979年に首相の座に就いて以来、サッチャーは、国内、国外共に支持者が少なかったが、それ以上に、重要な政治家とも考えられていなかった。だが、1982年のフォークランド戦争でサッチャーは、圧倒的な存在感を示したのである。この戦争を通してのサッチャーの言葉、断固とした態度、そして自ら下した決断は世界中の注目を集め、その後のいわゆる「サッチャリズム」という言説には、必ず「フォークランド精神」との言葉が伴っていた¹³⁹⁶。

戦争あるいは紛争が存在する限り、その戦争や紛争を「指導」する必要があるとの事実は将来においても変わらない。本論での考察を通じて確実に言えることは、戦争指導という言葉今日の観点から捉え直した上で、すなわち、ルーデンドルフが唱えたような「軍人による戦争指導」や「軍人を中心とした戦争指導」ではなく、今日の^{シビリアン・コントロール}文民統制の観点から文民政治指導者を頂点とする政治、経済、社会全般、そして、もちろん軍事の領域を含めた包括的な概念として再定義した上で、戦争指導——近年ではこの概念は国家安全保障戦略、あるいはさらに高次の大戦略などと表現される——という言葉を用いるのであれば、将来も意義があるということである。

そして、その根底を流れる思想には、「政治家（あるいは文民）には過ちを犯す権利がある」との確信がなければならない。

だが、もちろん本論で考察したフォークランド戦争も、多くの問題点及び負の遺産を遺すことになる。

第1に、例えばこの戦争の最前線で戦ったイギリス海兵隊ジュリアン・トンプソン准将が、フォークラ

¹³⁹⁵ 詳しくは、清水多吉、石津朋之共編著『クラウゼヴィッツと「戦争論」』彩流社、2008年を参照。

¹³⁹⁶ サッチャーがフォークランド戦争当時のイギリス国内の「空気」を主導し、かつ、そこから利益を得る過程の中で、「フォークランド精神」が生まれてきたのである。詳しくは、G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989), p. 135 を参照。また、サッチャーはフォークランド戦争後のある演説の中で、「フォークランド精神」が何を意味するかについて以下のように述べている。すなわち、「私たちは退却する国であることをやめました。それに代えて、私たちは新しい自信を見出しました。その自信は国内での経済の戦いの中から生まれ、1,3000 kmの彼方で試され、本物であることが分かりました。・・・（中略）・・・イギリスを過去何世代にもわたって燃やし続け、再びかつてと同じように明るく燃え始めたあの精神に、もう一度火を付けたことを喜んでいるのです。イギリスは、自らを南大西洋に再び見出しました。そして、手にした勝利から後戻りすることはないであります。マーガレット・サッチャー著、石塚雅彦訳『サッチャー回顧録』日本経済新聞社、1993年、上巻、297～298頁。

ンド戦争は「アルゼンチンに負けるはずの戦争」であったと評価したように¹³⁹⁷、確かにイギリスは、サッチャーの強力な戦争指導にもかかわらず、一步間違えれば敗北するところまで追い詰められていたのである。ここに、戦争における政治家の責任の大きさをめぐり問題が出てくる。

第2に、この戦争に勝利したイギリス軍兵士でさえも自殺した者や長期にわたって心的外傷後ストレス障害（PTSD）に苦しんだ者が多い¹³⁹⁸。もちろん、この戦争による物質的な損害は膨大な量に上った¹³⁹⁹。ここに、一体、戦争の勝利とは何かという問題を冷静に考える必要性が出てくる。

実際、三浦瑠麗の著作『シビリアンの戦争』では以下のような記述が見られる¹⁴⁰⁰。

フォークランド戦争は、開戦を支持した一般国民が血の代償を購わず、完全に職業軍人化された軍隊が、元来、国民の関心が低かったはずの地域で困難な戦争を強いられ、犠牲が生じたという点で現代的な民主主義国家による戦争の性格を持つ。つまり、一般国民にとっては戦争の代償を意識せず、離れた場所から観戦し、「消費」することのできた戦争であった。

イギリス国民の態度には、もっと冷酷な兵士への無関心も現れた。この戦争は、多くの国民にとって遥かに遠い、そして大して得るところはないものの、安全な戦争であった。

三浦の著作の主題は、一般的な認識とは反対にシビリアン（文民）の言動が戦争に導く事例が多いというものであったが、実は図らずもこれは、本論で強調した戦争における政治家のリーダーシップの重要性のいわば裏返しである。興味深いことに、フォークランド戦争時の三軍参謀長であったルウィンは、軍事作戦が比較的順調であった当初、政治家がその成功に味を占めて「戦争中毒症」になることを懸念していたほどである¹⁴⁰¹。何れにせよ政治家は、平時、戦時はもちろん、戦後の復興期においても自国民に対して大きな責任を負うのであり、また、負うべきである。

第3に、フォークランド戦争の結果としてイギリスの遠征型の戦力投射能力が維持されたため、これが災いして後年の湾岸戦争、イラク戦争、そしてアフガニスタン戦争への軍事力の派遣につながったとの根強い批判がイギリス国内には存在する。これは、大戦略あるいは国家戦略をめぐり問題を提起している。

だが確かに、この戦争の真の勝者はイギリス海軍であったとの冷笑的な評価がある。なぜなら、その後、海軍は（そして、ある程度は空軍も）維持され、また、その要求は認められた。逆に陸軍が予算削減の対象となったが、実際、フォークランド戦争は新たな航空母艦の建艦計画を推進する契機になった。この建

¹³⁹⁷ 三浦瑠麗著『シビリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、121頁。

¹³⁹⁸ 『朝日新聞』2007年（平成19年）4月2日（月）夕刊及び『朝日新聞』2007年（平成19年）4月3日（火）朝刊。

¹³⁹⁹ G. M. Dillon, *The Falklands, Politics and War* (London: Macmillan, 1989), pp. 237- 242.

¹⁴⁰⁰ 三浦瑠麗著『シビリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、110頁、111頁。

¹⁴⁰¹ 三浦瑠麗著『シビリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、121～122頁、Max Hastings, Simon Jenkins, *The Battle for the Falklands* (New York: W. W. Norton & Company, 1997), p. 290.

艦計画は1960年代以降、常にイギリス財務省が反対していた案件であったにもかかわらず、である。イギリス海軍はまた、水陸両用作戦能力を確保することにも成功した¹⁴⁰²。

フォークランド戦争に対するこうした懐疑論がイギリス国内に根強く存在する一方で、歴史家ジョージ・ボイスが鋭く指摘したように、大英帝国の植民地をめぐる戦いの中で、フォークランド戦争ほどイギリス国民の間で広く「正義の戦争」としての地位を勝ち得たものがないことも事実である¹⁴⁰³。また、イギリスの歴史家ブライアン・ボンドは、フォークランド戦争を総括する中でその正統性を強調する反面、少々諦めの境地で以下のように述べている¹⁴⁰⁴。

近年、主権国家の軍事力行使の有用性及び正統性に対して疑問視する声が大きいが、それでも主権国家の軍事力がその存在を正当化できることがあるとすれば、まさにフォークランド戦争はその好例である。しかしながら、イギリスの若い世代が見事な軍事的成功にはあまり関心を示さず、逆に、「ヘネラル・ベルグラノー」撃沈の合法性といった事柄に関心を寄せていることには驚きを禁じ得ない。

本論を作成するに当たってアルゼンチン側の史資料を入手することは極めて困難であったが、関係者に対する聞き取りなどから確認できたこととして、以下の内容が挙げられる。

すなわち、アルゼンチン側の指導者としてのガルティエリの戦略とはいかなるものであったかとの当方からの問いに対して、アルゼンチンのフォークランド諸島上陸作戦は、イギリスを追放することだけを目的として実施されたものであるとの回答が得られた。そして、アルゼンチンは、フォークランド諸島から一旦イギリスを追い出してしまえば、①マルビナス（フォークランド）諸島はイギリスから遠距離にある事実、②1947年に締結された汎アメリカ相互援助条約（Inter-American Treaty of Reciprocal Assistance: TIAR）の存在の結果、アメリカはイギリスへの支持を明確にはしないであろうとの予測、③フォークランド戦争以前のアルゼンチンに有利な国連決議の存在と、それに対する多くのヨーロッパ諸国の支持、④他の領土問題をめぐってイギリスが「弱み」を抱えていた事実、などから、イギリスが新たな現状を受け入れるであろうと楽観視していたようである。こうしたアルゼンチン側の関係者に対する聞き取りの結果は、基本的にはイギリスの公刊戦史の内容と一致する。

また、フォークランド戦争によってイギリス社会全般が変化したかという問題をめぐっては、今日でも歴史家の論争が続けられているが、それにもかかわらず、少なくともこの戦争が何も解決しなかったとの議論は明らかに間違っている。なぜなら、この戦争によってイギリスはフォークランド諸島を奪還し、今日に至るまで同諸島はイギリス領のままであるからである。フォークランド戦争に留まらず、戦争あるい

¹⁴⁰² Panel Discussion: “Twenty Years On: The Falklands War in Perspective,” *RUSI JOURNAL*, June, 2002.

¹⁴⁰³ 三浦瑠麗著『シビリアンの戦争——デモクラシーが攻撃的になるとき』岩波書店、2012年、123頁、George D. Boyce, *The Falklands War* (New York: Palgrave, 2005), pp. 3-5.

¹⁴⁰⁴ ブライアン・ボンド（石津朋之訳）「現代戦における『勝利』の意味」軍事史学会編『軍事史学』通巻143・144号（平成13年3月）。

は軍事力は何も解決できないのかといった問いは、戦争と平和をめぐる根源的な問題としてさらなる検討が必要とされる。

フォークランド戦争後のイギリス及びアルゼンチンの状況であるが、例えばフォークランド戦争開戦 25 周年を迎えた 2007 年の時点でのアルゼンチンでは、当時の中道左派政権がこの戦争は「誤りであった」と明言した。記念式典に大統領が欠席するという異例の事態が生じ、副大統領が代理出席することになった。だがその一方で、式典でのアルゼンチン国旗には、「我々は戻る」と書かれていたそうである¹⁴⁰⁵。

フォークランド戦争を始めた当時の軍事政権に対する批判や敗戦の屈辱などから、アルゼンチンではこの戦争を多くの人々が「馬鹿げた戦争であった」と振り返る一方、遺族たちは「国のために生命を捧げた若者たちが忘れ去られている」とその窮状を訴えたそうである。「弟は、愚かな権力者に二度殺された」との批判もあった。そこには、戦場に送った軍事政権の指導者によって生命を奪われ、その後の民主政権の指導者によって「愚かな過去」として人々の記憶からも消されたとの遺族の思いがある¹⁴⁰⁶。

実際、アルゼンチン軍兵士の中には鬱病やアルコール中毒になる者も多く、数百名が自ら生命を絶つたとの報道も見られる。なるほどこうした事象は、第一次世界大戦やヴェトナム戦争の後にも同様に見られたものであったが、それにしてもこの数字は大き過ぎ、フォークランド戦争の負の遺産にアルゼンチン国民が今日でも苦しんでいる実態がうかがわれる。

一方、フォークランド戦争 25 周年に際してイギリスは、当時の外相が 2007 年 2 月にアルゼンチン政府に対して「和解の精神に基づいて両国の犠牲者を哀悼する」目的で、合同の追悼式典を提案したが、アルゼンチン側は「イギリスの勝利記念式典の性格を免れない」と拒否したという。また、この提案に対してはイギリス国民、とりわけ軍人からの反発は強く、同国政府は提案を撤回する事態となった¹⁴⁰⁷。

その後、2012 年の開戦 30 周年を迎えることになるが、30 周年を目前にして出版されたフリードマンによる公刊戦史は、基本的には「フランス報告書」を踏襲した内容であった。例えば、いわゆる「インテリジェンスの失敗」についても、情報分析の失敗ではなく、そもそも必要な情報がなかったとの見方を強調している¹⁴⁰⁸。

また、この公刊戦史はアルゼンチン側の「奇襲」を、①予見できたか、②阻止できたか、との問いについても、「フランス報告書」と同様に否定的な見解を述べている。さらには、仮に早期に情報が入手できたとしても、イギリスはいかなる有効な対処もできなかったであろうとの見解も示されている¹⁴⁰⁹。

¹⁴⁰⁵ 『朝日新聞』2007 年（平成 19 年）4 月 2 日（月）夕刊及び『朝日新聞』2007 年（平成 19 年）4 月 3 日（火）朝刊。

¹⁴⁰⁶ 『朝日新聞』2007 年（平成 19 年）4 月 2 日（月）夕刊及び『朝日新聞』2007 年（平成 19 年）4 月 3 日（火）朝刊。

¹⁴⁰⁷ 『朝日新聞』2007 年（平成 19 年）4 月 2 日（月）夕刊及び『朝日新聞』2007 年（平成 19 年）4 月 3 日（火）朝刊。

¹⁴⁰⁸ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), pp. 715-721.

¹⁴⁰⁹ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), pp. 715-721.

つまり、結局のところ開戦の主導権はアルゼンチンの国内問題に帰するのであるが、そのアルゼンチン側ですら、最後の最後まで戦争の決断を下すことができなかった。おそらく最終的にフォークランド諸島への侵攻をアルゼンチンが決断したのは、南ジョージア諸島の占領に対するイギリスの反応を待ってからである¹⁴¹⁰。そして仮に事前に侵攻の情報を入手できたとしても、前述したようにイギリスにはそれを阻止する外交的、軍事的方策がなかったのである。

また、公刊戦史の中でフリードマンは、フォークランド戦争の「教訓」として、①アルゼンチン側は紛争を段階的にエスカレートさせるであろう、すなわち、直ちに軍事行動は取らないであろうとのイギリス側の先入観があったと述べると共に、紛争に際してこうした先入観を是正することがいかに困難であるかについて指摘している。また、②新たな情報を断片的に入手した場合、それを総合的に再評価する時間的、精神的余裕のなさも指摘している¹⁴¹¹。

さらにフリードマンは、あえてイギリス側の問題点を挙げるとすれば、①問題解決の主導権をアルゼンチン側に渡し過ぎた、②南ジョージア諸島の占領に対するイギリスの反応は、その後の展開を予測しないままのものであったため、いたずらにアルゼンチン側の過剰反応を招いた、とも述べている¹⁴¹²。

フォークランド諸島の将来については、①共同統治^{コンドミニウム}という解決策、②対立及び戦争が継続するとの見方、③国連（国際司法裁判所）などによる調停の可能性、④時間に流れに任せる（棚上げ）、といった可能性が考えられるが、2013年のフォークランド島民による住民投票^{レファレンダム}では、島民の圧倒的多数がイギリスへの帰属を希望している。

「平成 23 年度以降に係る防衛計画の大綱」では、島嶼部の防衛が重視事項の一つとなった。それを受ける形で、本論の目的は、フォークランド戦争史の研究を通じて防衛省の政策策定に貢献すること、そして、防衛省・自衛隊の教育に寄与することであった。

本論のフォークランド戦争の研究を通じて得られた論点とインプリケーションを、以下で改めて整理しておこう。

本論の第 1 部はフォークランド戦争の政治的、外交的側面について検討したものであり、1960 年代のフォークランド問題に関わるイギリスとアルゼンチン間の外交交渉開始から 1982 年の戦争勃発まで、そして、戦争開始から停戦成立までの期間を扱っている。第 1 部の基本的な立ち位置は、イギリスの視点から見たイギリスとアルゼンチン間の外交交渉、そして諸外国との関係であり、主な論点としては領有権をめ

¹⁴¹⁰ アルゼンチン軍事評議会が最終的にフォークランド諸島への侵攻を決断したのは、3月26日とされる。

¹⁴¹¹ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), pp. 722-735.

¹⁴¹² Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), pp. 722-735.

ぐる外交交渉の過程や戦争中の戦争指導及び外交交渉、といったものが挙げられる。

フォークランド戦争に至る外交交渉については、1990年のLawrence Freedman, Virginia Gamba-Stonehouse, *Signals of War*が古典的研究であり、これは、フォークランド問題をめぐるイギリスとアルゼンチン間の認識の違いが戦争を引き起こしたとする著作であった¹⁴¹³。その後、公刊戦史として2005年に、Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign, Vols. I・II*が出版されたことで、この戦争をめぐる外交交渉のかなり細かい経緯と軍事作戦の詳細が明らかになった¹⁴¹⁴。本論の内容は、その多くをこの公刊戦史に負っている。

但し、このフリードマンによる公刊戦史においてもインテリジェンスや特殊作戦に関わる事項は秘匿されており、こうした領域については不明瞭な点も多々残っている。もちろん、こうした点については、例えば1997年のNigel West, *The Secret War for the Falklands*や2010年のRichard Aldrich, *GCHQ*に代表される研究によってある程度は補うことができた。

また、本論ではイギリス公文書館(TNA)やロンドン大学キングスカレッジのリデルハート軍事史料館(LHCMA)などに保存されている一次史資料や証言集なども活用し、重層的な分析を心掛けた積りである。

そして、これらの史資料の分析から本論では、フォークランド戦争へと至る主たる要因として、①イギリスの外交政策におけるフォークランド問題の優先順位の低さ、②イギリスとアルゼンチンのボタンの掛け違い、といった結論が導き出された。また、サッチャーの戦争指導については、イギリスの伝統に即しつつ戦時内閣を創設したことで、保守党内での政権基盤が弱かったサッチャーが戦争指導に成功した事実が明らかになった。

政治及び外交的側面では、フォークランド問題に関するイギリスの優先度の低さ、関心の低さに起因するアルゼンチン側の侵攻意図の見落とし、そして、財政的困難による無分別とも思える軍事費の削減が、アルゼンチンに誤ったシグナルを送っていた事実を強調したい。また、この戦争はアルゼンチン側が「イギリスは反攻してこない」との希望的観測の下で始まり、戦争中もその誤りを是正する処置が、陸軍をフォークランド諸島に送り込む以外に殆ど取られなかった事実は特筆に値する。

続く本論の第2部では、フォークランド戦争を軍事的側面から分析した。

アルゼンチンによるフォークランド諸島への侵攻は、当初、優勢な兵力で奇襲攻撃して無血占領する構想で、4月2日、イギリスの約80名の守備兵に対し、約860名の兵士をスタンレーへ上陸させた。イギリスは若干の抵抗の後、降伏することになる。

その後、サッチャーの政治主導による迅速な機動部隊の派遣命令により、NATOのノルウェー展開計画を基礎として4月5日、第1陣の艦艇がイギリスを出発した。前述したように、アルゼンチンにとってイ

¹⁴¹³ Lawrence Freedman, Virginia Gamba-Stonehouse, *Signals of War* (London: Faber and Faber, 1990).

¹⁴¹⁴ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign, Vol. I [The Origins of the Falklands War] and Vol. II [War and Diplomacy]* (London: Routledge, 2005).

ギリスの奪還作戦は想定外であり、慌てて歩兵約 12,000 名、若干の火砲及び航空機をフォークランド諸島に送り込むだけで精一杯であった。スタンレーを中心とした固定防御を基礎としたが、要塞化は行われなかった。

イギリスは 4 月 12 日、フォークランド諸島周辺で海上封鎖 (MEZ) を実施し、同月 30 日にはそれを全面封鎖 (TEZ) に強化した。イギリス機動部隊は 5 月 1 日から、アルゼンチン海、空軍力の消耗を目的として、水上艦艇及び航空機によるフォークランド諸島への攻撃を開始した。同日、アルゼンチン空軍機がイギリス海軍機と交戦したが、イギリスが一方的な勝利を収めた。アルゼンチン艦隊もイギリス機動部隊を迎撃するために出撃したが、会敵することなく、アルゼンチン本土へと向きを変えることになる。翌日、イギリスの原子力潜水艦(SSN)がアルゼンチン巡洋艦を撃沈したが、5 月 4 日にはアルゼンチン海軍機が空対艦ミサイルでイギリス駆逐艦を撃沈した。

5 月 20/21 日夜、イギリスはサン・カルロスへ上陸を行った。21 日にはアルゼンチンは上陸を察知し、航空機による艦艇攻撃を行ったが、自軍の陸上部隊には機動力がないため、そしてスタンレーへのイギリスの本格的な上陸を恐れたため、サン・カルロスを攻撃することはなかった。

一方、ヘリコプターの不足と悪天候による飛行不能により、イギリスは輸送力が極度に不足し、スタンレーへの進撃は遅延した。当初アルゼンチンは、スタンレー北方に防御の重点を置いていたが、5 月末にはスタンレー西方に兵力を送り始める。だが、やはりここでも機動力不足のため、その兵力は少数に留まった。イギリスは 6 月 10 日、兵員及び物資の前送を完了、11/12 日から攻撃を開始し、次々と制高点を押さえ、14 日にはワイヤレス稜からウィリアム山に至る地域を占領した。アルゼンチン軍兵士は戦意を完全に失い、スタンレーへと後退、同日、マルビナス最高指揮官メネデス少将は降伏に応じることになる。最終的にアルゼンチン側の死者は 655 名、負傷者は 1,336 名であり、イギリスは死者 253 名、負傷者 777 名であった。

軍事的側面では、古くからの鉄則の一つである海上優勢や航空優勢の重要性、そして兵站（後方、あるいは補給）の重要性がこの戦争においても改めて確認された。また、確かにフォークランド戦争の結末だけを見ればイギリスの一方的な勝利であったが、戦争を通してイギリス軍上層部に方針をめぐる深刻な対立があったこと、イギリスが偵察や火力支援が不十分な中で危険な攻撃を敢行したことなど、多くの問題点が確認された。

湾岸戦争やイラク戦争、そしてアフガニスタン戦争で注目された特殊部隊であるが、実は既にフォークランド戦争においても、特殊部隊の有用性は証明されていたのである。すなわち、イギリスはフォークランド諸島内の状況偵察のために陸軍特殊空挺部隊 (SAS)、海軍特殊舟艇部隊 (SBS) を上陸させたのである。そしてこうした部隊は、ヘリコプター、小型ボート、さらには通常型潜水艦などでフォークランド諸島に上陸し、本格的な奪還作戦を実施するために不可欠な情報を収集したのである。

例えばペブル島に上陸した SAS は、同島の空港にあったアルゼンチン航空機 11 機全機（諸説あり）を破壊し、燃料及び弾薬を炎上させたため、以後、この空港がアルゼンチンに使用されることはなかったの

である。また、SAS は悪天候の中での作戦で犠牲者を出さず、大きな戦果を収め、その能力をアルゼンチンに見せ付けることになった¹⁴¹⁵。

実際、フリードマンは公刊戦史の中でフォークランド戦争での軍事作戦の特徴として以下の点を挙げている¹⁴¹⁶。

- ・当時の主要な軍事作戦は、実戦で試されていない装備品及び概念によらなければならない、実験的であった。
- ・第二次世界大戦を経験した者は高級指揮官だけであり、殆どの軍人は低強度作戦の経験しかなかった。
- ・緊急作戦計画が用意されている作戦はあったが、フォークランド諸島の防衛に関する緊急作戦計画は存在しなかった。
- ・軍事的な分析は不十分で、作戦の困難さ、無謀さを強調する傾向が強くなった。
- ・アルゼンチンが占領した後、フォークランド諸島を奪還する上で実際に必要な作戦要素として、当初、イギリス軍の指揮官が理解したのは、全く異なる文脈によるものであった。つまり、ワルシャワ条約機構軍との戦闘では、海軍は誘導方式ではない爆弾及び機銃による航空機からの直接攻撃よりも、開かれた海洋での潜水艦及び空対艦ミサイルに備える必要があったのである。また、水陸両用作戦に関しては、NATO 諸国に対する増援という文脈の中で、友好国が護衛及び航空機による上空掩護^{エア・カバー}、そして沿岸の戦闘群からというよりは、むしろ海岸地域からの輸送の提供が可能な支援国の存在を当然の前提としていた。
- ・当時、統合司令部はなく、空、陸に関する助言は、ロンドン西端の特別区に位置するノースウッドの海軍司令部に集約された。

最後に、本論の執筆最終段階で新たに「国家安全保障戦略」が発表されると共に、「平成 26 年度以降に係る防衛計画の大綱」が策定された。

この新たな大綱では「統合機動防衛力」の構築が唱えられており、島嶼部に対する攻撃への対応としては、本格的な水陸両用作戦能力の整備などが記されている。そして、そのための手段として、例えば水陸両用車やティルト・ローター機の整備が示されている。

もちろん、1982 年のフォークランド戦争の様相と、21 世紀の今日の戦争の様相、そしてアジア太平洋地域における戦略環境を短絡的に結び付けることは許されないものの、それでも、海上優勢及び航空優勢の重要性、統合運用の重要性、そして、部隊の機動展開の必要性などについては、フォークランド戦争という歴史から改めて学ぶべき事項は多々あるように思われる。

¹⁴¹⁵ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), p. 435.

¹⁴¹⁶ Lawrence Freedman, *The Official History of the Falklands Campaign*, Vol. II [War and Diplomacy] (London: Routledge, 2005), pp. xxix-xxxii.

フォークランド戦争史

発行日 平成 26 年 3 月 31 日

編 集 防衛研究所戦史研究センター

発 行 防衛省防衛研究所

〒153-8648

東京都目黒区中目黒 2-2-1

電話 03-5721-7005 (代表)

ISBN 978-4-86482-020-2